法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-05

『ウィードシース』と『ベーオウルフ』におけるジュート : R. W. Chambers の見解を中心に

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
133
(終了ページ / End Page)
151
(発行年 / Year)
2015-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010724

Hosei University Repository

『ウィードシース』と『ベーオウルフ』におけるジュート
――R. W. Chambers の見解を中心に

法政大学キャリアデザイン学部　教授　岩谷　道夫

1.

Widsith『ウィードシース』は、古期英語の詩としては最古のものに属し、西暦４世紀から６世紀までのアフリカ、ヨーロッパ、アジアの様々な国家の名称が列記されている。そしてその中には、当時実在していた多くのゲルマン人諸部族国家が含まれ、中世初期のゲルマン人諸部族およびその国家についての、貴重な記述となっている。一方、*Beowulf*『ベーオウルフ』は、古期英語最大の叙事詩的な作品で、ベーオウルフという架空の英雄を主人公とした物語詩であるが、その中に、西暦６世紀を中心としたゲルマン人諸部族国家が言及され、デンマークを中心に、当時の北海沿岸およびスカンジナビア半島の実在のゲルマン人の国々についての記述が見出される。『ウィードシース』も『ベーオウルフ』も、歴史的記述を目的に描かれたものではないが、その中に、中世初期ゲルマン人諸部族国家についての具体的記述があり、またそれらが、実在したゲルマン人諸国家の記述と見なされることから、歴史的記述の観点からも、大変重要な史料と考えることができる。

『ベーオウルフ』の研究史において、今日までおそらく最も重要な貢献をしている研究者として、Fr. Klaeber クレーバーと R. W. Chambers チェインバーズの二人を挙げることができるであろう。クレーバーによって編纂された *Beowulf and The Fight at Finnsburg*(1)は、『ベーオウルフ』研究の到達した最高点の一つと言えよう。その編纂は精緻で、Notes、Glossary も懇切無比であり、また、その Introduction は、入門者への適切な知識を提供するだけで

Hosei University Repository

なく、それ自体が、『ベーオウルフ』研究における先端的研究でもあった。一方、『ベーオウルフ』における諸問題を一貫して追究し続け、そして多くの定説を作り続けてきたのは、チェインバーズであった。チェインバーズの、*Beowulf ——an Introduction of the Study of the Poem with a Discussion of the Stories of Offa and Finn*(2)は、『ベーオウルフ』研究史上の白眉であり、今後も凌駕され得ないほどの重要性を持つ研究書である。そこには、『ベーオウルフ』の Geatas、Eotan 等について、問題の所在の確認、そして他の研究者の主張の紹介とチェインバーズ自身の主張の展開を通して、『ベーオウルフ』研究のこれまで辿って来た困難な道筋が、誠実に、客観的に記述されている。チェインバーズのその書物を通して、私達は『ベーオウルフ』研究史の核心的部分に触れることができるのである。

チェインバーズは、『ベーオウルフ』に関するその研究書の他に、『ウィードシース』についての書物、*Widsith—— a Study in Old English Heroic Legend*(3)も著わしている。その書物は、『ベーオウルフ』についての前述の書の初版の10年ほど前に書かれたもので、『ウィードシース』の中に見出されるゲルマン人諸部族およびその代表的人物を、解説的に詳述している。そこでは、『ベーオウルフ』についての書のように、論争的に諸問題が追究されているわけではないが、チェインバーズの見解が随所に見られ、大変興味深い内容の研究書である。

本稿では、『ベーオウルフ』および『ウィードシース』に言及されたゲルマン人諸部族、特にジュートについて、上記二つのチェインバーズの書に見られる見解を通して、その実体を探りたいと思う。また、併せてクレーバーの見解も検討したい。ジュートは、その居住地域も含め、いまだ明らかにされていない点が多く、the Jutish question と呼ばれるような困難さを含んでいるからである(4)。なお、『ベーオウルフ』の稿本は、前述のクレーバーによる第３版と J. D. Niles ナイルズ等の第４版(5)を用いる。また、『ウィードシース』は、J. P. Krapp クラップと E. v. K. Dobbie ドビーの稿本(6)を用いることにする。

Hosei University Repository

2.

『ウィードシース』には、ブリテン島に移住する以前、大陸にいた頃の、アングル、サクソン、ジュート、そしてフリージアンについての言及が見出される。例えば、ジュートは、Ytan ユィータンとして登場し(7)、その前後の行には、他に、フランクとフレーザン（フリージアン）が記されている(8)。その記述により、ジュートが、フリージアンとフランクの近くに居住していたことが見て取れる。『ウィードシース』では、ゲルマン人の部族国家は、互いに近い居住地域の国家が列挙されているからである。ジュートが、フリージアンとフランクの近くに居住しているということは、まさに『ベーオウルフ』と重なる記述である。『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」では、ジュートがフリージアンの近くと言うよりも、フリージアンの領土の中に居住しているし(9)、また、それよりも少し後の時代であるが、ベーオウルフの祖国イェーアタスの国王であったヒイェラークの、フランク王国への侵入についての記述では、その侵入に対し、フランクとフリージアンの連合軍による撃退の模様が描かれている(10)。ジュート、フリージアン、フランクのそれぞれの居住地域の記述が、『ウィードシース』と『ベーオウルフ』の双方に重なる部分があり、それぞれを記述した詩人達の認識が共通したものであることを示している。

ところで、ジュートのもともとの居住地域は、ベーダによれば、ユトランド半島の北部であった(11)。そしてベーダの約600年前に、ローマのタキトゥスによって記された内容も、ほぼ同じものであった(12)。つまり、もともとジュートは、ユトランド半島の北部にいたが、『ウィードシース』や『ベーオウルフ』に記述された頃には、ジュートの一部は、フリージアンの居住地域である北海沿岸の地に移動していたと考えられる。チェインバーズは、『ウィードシース』に記述されたジュートについては、次のように述べている(13)。

> Those who would make the Jutes originally neighbours of the Frisians are not agreed whether to put them on the north-eastern border (Siebs in Pauls Grdr. (2) I , 1157) or on the south-west, in the Netherlands (Moller,

Hosei University Repository

Heuser). Hoops' suggestion that the Jutes may have come from Jutland in the first instance, but may have settled temporarily in the Netherlands (Waldbäume, 585), is an ingenious compromise, which devices considerable support from the fact that there is some evidence that the Angles and Saxons attacked Britain from such temporary settlements in the Netherlands[1].

上記の最後の文章にある注１は、チェインバーズの原著の注である。チェインバーズは、上記の最初の文章の前に、ジュートの居住地域についての様々な研究者の見解を検討し、ジュートがユトランド半島にいたとするベーダの記述を重視する見解と、ベーダの記述を誤りとしてジュートの居住地域をフリージアンの近くであるとする見解を対照させている。そして最終的に、上の文章に見られるように、Hoops の説に賛同し、ブリテン島に渡ったジュートは、もともとユトランドから来たのであったが、一時、当時のオランダに居住していた、という説に共鳴する。その説が、アングルとサクソンのそれぞれが、直接ベーダで記述されている故地からブリテン島に渡ったのではないという事実との関連からも、妥当なものとするのである。チェインバーズは、その説を、an ingenious compromise と評していて、積極的にその説の正当性を確信しているわけではないが、いずれにしても、チェインバーズは、上の書を刊行した1912年の段階で、『ウィードシース』に記述されているジュートがフリージアンの居住地域の近くにいたという説を支持していたと考えられる。

チェインバーズは触れていないが、『ウィードシース』の中で、ジュートが、フリージアンの近くに記述されている理由、つまりジュートがユトランドからフリージアンの近くに移住していた理由として考えられるのは、ユトランドへのデネ（デーン人）の侵入である。デネの侵入によって、ジュートは別の地域への移住を余儀なくされたからである。その場合、ジュートの大部分がユトランドを離れたか否かについては、見解の分かれるところである。例えば、アングルは、西暦４世紀の半ば頃まで、ユトランド半島のジュートの南に居住していたが、デネがユトランドに侵入する以前に、ユトランドを離れてブリテン島に向かったと考えられている。その場合、アングルの大部分が、ユトランドを

Hosei University Repository

後にしたと推測することが出来る。それは、ベーダの記述にもその状況が反映されていると考えられるからである(14)。チェインバーズには、ジュートが二つに分かれて存在したという言及は見出されない。しかしながら、実際には、デネによるユトランドへの侵入で、もともとそこに居住していたジュートのうち、デネの支配に屈することを潔しとしない一派は、ユトランドを離れ、フリージアンの居住地域へと移住し、一方、ユトランド半島に残り、敢えてデネの支配を甘受するジュートもいたと考えられる。そしてユトランドを離れたジュートは、アングルの場合とは異なり、ジュートの大部分ではなかったものと推定される。二つに分かれたジュートについては、トールキンのフィンズブルフの戦についての論考に、詳述されている(15)。それについては、本稿の後段で触れることにする。

チェインバーズは、『ベーオウルフ』についての書で、「フィン王の挿話」に登場する、フリージアンの地域に居住していたEotanエーオタンという人々の実体を追究し、そのエーオタンがジュートであると断定したのであるが、その時にも、上と同じような見解を表明している。ただ、そこにおいても、エーオタンすなわちジュートが、なぜフリージアンの近くにいたのか、そして、ジュートが二つに分かれていたという点には、触れていない。それらの事柄は、デネとジュートの関係に、そしてフィンズブルフの戦の原因に関係して来る。そこで、『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」のエーオタンについてのチェインバーズの見解を検討したいと思うが、その前に、『ウィードシース』に関するチェインバーズの書の中の、ジュートとともにブリテン島に渡ったと考えられているアングル、サクソン、フリージアンの記述に触れることにしたい。

3.

『ウィードシース』に関するチェインバーズの書の中で、アングルについての記述は、何箇所も見出されるが、最も詳しく述べられているのは、The limits of Angelというタイトルの項である(16)。そこでは、チェインバーズは、アルフレッド大王によって古期英語に翻訳されたオロシウスの『歴史』の中で、アルフレッド大王が自ら付加したオーホトヘレの紀行の記述に言及し、またタ

Hosei University Repository

キトゥスの『ゲルマーニア』との関連も考慮に容れながら、『ウィードシース』に触れられているアングルについて追究している。そして、そこで強調されているのは、アングルとデネの間の友好的な関係である。アングルの大部分がブリテン島に渡った後に、デネがユトランド半島に移動して来たのであるが、ユトランドに残った少数のアングルの人々にとっては、常にヘルーリーやヘアゾベアルダン、そして近隣のスウェーヴェのようなゲルマン人部族国家による侵入に対する恐怖があったので、以前から同じネルトゥス信仰を持ち、同じインガエウォネースの連合体に属するデネによる侵入は、むしろ歓迎されたと述べる。その証拠として、チェインバーズは、アングルとデネの間に、戦の伝承が何も残されていないこと、そして、サクソ・グラマティクスの『デンマーク史』の中に、アングルの歴史が組み込まれ、それぞれ兄弟関係のように描かれている点を挙げている。確かに、アングルとデネの間の戦は知られていない。その理由は、アングルがデネのユトランドへの移動以前に、その大部分がブリテン島に渡っていたということもあると思われるが、ユトランドに残った少数のアングルがデネによって蹂躙されたという伝承が全く残されていないのも事実である。アングルとデネの関係は、少なくともユトランド半島においては友好的であったと言えよう。アングルのブリテン島への移住後の、デーン人のブリテン島への侵入の時は、状況が一変するけれども。

前述のヘルーリーについては、スカンジナビアから渡来したゲルマン人部族で、その移動距離の広範囲であったことが知られている。ゲルマン人諸部族の中では、後のヴァイキング時代の北欧人と比較的近い行動様式を持っていた。ただ謎の要素が多く、最終的にその行方がどのようになったかは、知られていない。もっとも５世紀から８世紀ごろに北ドイツからユトランド半島およびその南東地域にいたことは文献上確認されているが。ゲルマン民族史の碩学チャドウィックは、『ウィードシース』に記されたスウェーヴェが、実はヘルーリーだったとする論述を展開している(17)。大変興味深い説であるが、実証は困難であろう。筆者は、スウェーヴェについて、以前卑見を展開したことがあった(18)。スウェーヴェを、タキトゥスの『ゲルマーニア』に言及されているセムノーネスの流れを汲む一派としたのであるが、いずれにせよ、ヘルーリーについては、最終的に明らかな結論を引き出すのは困難と思われる。

Hosei University Repository

また、ヘアゾベアルダンは、『ウィードシース』と『ベーオウルフ』に見出されるゲルマン人国家であり、『ベーオウルフ』には、デネに対する敵対的国家として、しばしば登場している。ヘルーリーは、他の古い歴史的文献に言及されているが、ヘアゾベアルダンは、そのような文献には見出されない。ただ、『ウィードシース』と『ベーオウルフ』に言及されたゲルマン諸部族国家は、そのほとんどが実在の国家と考えられるので、ヘアゾベアルダンも、5世紀から6世紀に、バルト海からユトランド半島南部にかけての地域に存在していた国家であったものと推測される。

チェインバーズは、『ウィードシース』についての書の The limits of Angel に続く The Danes の項で、アングルとデネの友好関係について、タキトゥスの『ゲルマーニア』に言及されているネルトゥスの信仰の共通性と、インガエウォネースの連帯意識によるという点を強調している(19)。そのネルトゥス信仰については、チェインバーズは、そのアングルについての記述の前の項、The Worshippers of Nerthus で、その内容について触れている。ネルトゥス信仰は、北海沿岸のゲルマン人諸部族国家に信仰されていた大地の女神の信仰であり、チェインバーズは、その信仰の中心地は、一般的に考えられている今日のドイツの Helgoland 島ではなく、バルト海の Zealand、すなわち今日のデンマークのシェラン島であるとする。後に触れるように、シェラン島は、『ベーオウルフ』のデネの宮殿ヘオロットのあったところと推定されているので、チェインバーズは、そのシェラン島の重要性を喚起しているのかも知れない。一方、インガエウォネースは、タキトゥスだけでなく、プリニウス、プトレマイオスにも言及されている北海沿岸のゲルマン人諸部族の総称である(20)。『ベーオウルフ』においても、インガエウォネースは、イングウィネという言葉で何度か言及され、デネがイングという祖先を持つ諸部族の代表であるかのような記述がなされている(21)。古期英語で書かれた『ベーオウルフ』の中で、デネがそのように記述されているということは、チェインバーズの述べるように、アングルとデネが、友好関係にあったことの証拠であると言えるであろう。もっとも、ジュートがタキトゥスの『ゲルマーニア』における Eudoses エウドセースであるのであれば、ジュートもネルトゥスを信仰して、またインガエウォネースに属していたと思われるので、ジュートとデネの間も、同じように

Hosei University Repository

友好関係が存在しても不思議ではない。しかし、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」に見られるジュートとデネの関係は、仇敵のような関係であった。従って、アングルとデネの友好関係は、以前からのネルトゥスとインガエウォーネスの関係のみでは説明し得ないものがあるように思われる。

チェインバーズは、また、アルフレッドのオロシウスに言及して、アングルは、ブリテン島に渡る以前は、ユトランド半島中部だけではなく、その東のバルト海の島々にも居住していて、アングルがブリテン島に移住した後、スカンジナビア半島の南端にいたデネが、その島々およびユトランド半島中部に移動したので、アングルにとって、故地であるそのバルト海の島々に居住するようになったデネに、深い関心を持っていたと述べている。また、『ベーオウルフ』の中で、英雄ベーオウルフが訪れるデネの宮殿ヘオロットのあったところは、今日のデンマークのシェラン島と考えられているが[22]、チェインバーズは、そのシェラン島のヘオロットのあったところは、アングルにとっても、重要な場所であり、ブリテン島に渡ってからも、その場所に関心を持ち続けていたとしている。ブリテン島のアングルの故地が、ベーダの記述のユトランド半島中部だけではなかったことは、ステントンも指摘している[23]。チェインバーズの述べるように、アングルは、タキトゥスの『ゲルマーニア』に記されていた頃は、ユトランド半島中部の一ゲルマン人部族のアングリイーであったかも知れないが、その後、ブリテン島に移住するまでに、タキトゥスの『ゲルマーニア』のインガエウォネースの他の諸部族を合わせた、数倍大きな部族になっていた。従って、特にバルト海の島々を本拠として、デネとも友好関係があり、そして後のアングルに合流したゲルマン人にとっては、デネとのかつての旧交を維持したいという思いもあったかも知れない。ジュートも周辺のいくつかの部族の連合体になっていたと思われるが、ジュートとデネとの関係が良好でなかったのは、そのバルト海の島々との関係が、あるいは、そもそもアングルとの関係が、良好でなかった可能性も存在する。その問題はまた別の機会に譲りたい。

チェインバーズの『ウィードシース』に関する書で、フリージアンについては、主に、The North-Sea tribes in the time of Tacitus. The Frisians and Finn. という項に見出される[24]。しかしながら、その項でフィン王について詳

Hosei University Repository

述されているわけではなく、述べられているのは、主にタキトゥスの『ゲルマーニア』の中のフリースィイーについてである。タキトゥスの、フリースィイーはインガエウォネースに属し、祖先の Ing から来ていて、ゾイデル海を挟んで小フリースィイーと大フリースィイーに分かれているという記述に触れ、５～６世紀後の『ウィードシース』や『ベーオウルフ』との関連性を指摘する。つまり、ヒイェラークの侵入は、西のフリースィイーに対してであったが、フィン王のいる本体の王国は東のフリースィイーであったと述べる。フィン王とフィンズブルフの戦についての言及はない。

チェインバーズの『ウィードシース』についての書には、フリージアンの次に、Chauci and Saxons という項があり、サクソンの起源に触れている[25]。サクソンが、タキトゥスの『ゲルマーニア』におけるカウキーと合体して、さらに強大な部族国家になったと述べられているが、そこでは、サクソンの起源となったもう一つの部族である Reudigni レウディーグニーについての言及は見出されない[26]。興味深いのは、フィンズブルフの戦の伝承をブリテン島にもたらしたのは、フリージアンではなく、サクソンとジュートの吟遊詩人であるという指摘である。

４.

以上、『ウィードシース』に関するチェインバーズの書の中の、アングル、サクソン、フリージアン、そしてデネに関する記述を見て来た。それらのゲルマン人は、チェインバーズの『ウィードシース』についての書では、本文の独立した項のもとで論じられていた。ところが、ジュートに関しては、チェインバーズは、本文では触れず、Appendix の（D）The Jutes のみで触れている。その一部が、本稿の２.で引用した文章である。そこでは、チェインバーズは、ジュートについて、特にその居住地域に言及している。ジュートは、ベーダに言及されたユトランドの故地からブリテン島に渡る前に、一時今日のオランダのフリージアンの地域に居住していたという指摘である。しかしジュートとフリージアンの関係、そしてジュートとデネの関係については言及していない。その理由は何であろうか。それは、フィンズブルフの戦におけるジュートの存

Hosei University Repository

在をどのように考えるかに関係して来る。

『ウィードシース』についてのチェインバーズの論考は、1912年に刊行されている。結局、チェインバーズは、1912年の段階では、フィンズブルフの戦を、純粋にデネとフリージアンの戦と捉えていたのではないかと思われる。その戦は、デネとフリージアンの双方によって戦われた戦であり、たとえフリージアンの側にジュートがいたとしても、それはあくまでフリージアン側の友軍のような存在であり、対峙していたのは、あくまでデネとフリージアンであるという考え方である。確かに、古期英語詩の『フィンズブルフの戦』においては、そうであったであろう。その詩は、断片しか残されていないが、それにもかかわらず、その詩の全体を通じるテーマは、デネの側とフリージアンの側の壮絶な戦であり、ジュートの存在は、強調されていないように思われる。しかし、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」においては、どうであろうか。「フィン王の挿話」は、次のような言葉で始まる。

Ne huru Hildeburh　herian þorfte
Eotena treowe;　unsynnum wearð
beloren leofum　æt þam lindplegan
bearnum ond broðrum ;

（まことにヒルデブルフは、エーオタンの真率な忠誠心を称える理由はなかった。自らに何の過失もないのに、彼女は、その盾のぶつかり合いの中で、愛する子どもと兄を奪われたのであるから）[27]。

２行目の Eotena は Eotan エーオタンの複数属格で、エーオタンとは、ジュートのことである。「フィン王の挿話」においては、エーオタンの行為、つまりデネへの急襲が、フィンズブルフの戦の原因であったと強調されているのである。従って、エーオタンの存在は、極めて重要であると言わざるを得ない。また、「フィン王の挿話」では、そのエーオタンとフリージアンを最終的に打ち破ったデネの側の Hengest ヘンジェストの英雄性も、極限まで強調されているのであるが。

Hosei University Repository

チェインバーズの、フィンズブルフの戦についての見解を、チェインバーズの『ベーオウルフ』に関する書を通して確認したいと思う。チェインバーズの『ベーオウルフ』に関する書では、それは、主にそのPART Ⅲ、THE FIGHT AT FINNSBURGに見出される[28]。エーオタンについては、まず“a mysterious people”と表現し[29]、エーオタンが、デネの側に属するという見解と、フリージアンの側に属するという見解を紹介し、チェインバーズは、後者の立場で、前者の見解を批判してゆく。そしてその過程で、エーオタンという人々がジュートであるという結論に至る[30]。そしてその理由として、次の三つを上げる。（1）『ウィードシース』を通してジュートのフリージアンとの密接な関係を窺い知ることができる；（2）『ベーオウルフ』で、Heremodヘレモード[31]が追放され、流浪の状態だった時に、ジュートのもとに逃亡した時の様子が、言及されている；（3）イングランドの家系図で、牽強付会的な内容ではあるが、フィン王の父親のFolcwaldフォルクワルドが、ケント王国のジュート家系図の中に見出される。エーオタンがジュートであるという結論に至るチェインバーズの論証は、見事の一語に尽きる。しかしながら、エーオタンすなわちジュートが、フリージアンの側にのみ属するという前提で考えていくと、「フィン王の挿話」において、内容的に、とりわけ古期英語の三人称複数の代名詞hieの理解が困難になる箇所が生じて来るのである[32]。

結局、チェインバーズは、フィンズブルフの戦の原因を、デネとフリージアン対立を中心に理解していて、そこにおけるジュートの役割を過小評価していた。『フィンズブルフの戦』の詩の場合は、チェインバーズの解釈の通りであると思われるが、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」においては、その解釈では困難が生じて来るであろう。「フィン王の挿話」では、エーオタン、すなわちジュートこそ、フィンズブルフの戦の原因として言及されているからである。チェインバーズ自身も、「フィン王の挿話」について、フィンズブルフの戦の原因は、エーオタンすなわちジュートにあったと述べている。しかしながら、その原因というのは、ジュートの急襲で戦が始まったという意味である。チェインバーズは、本質的には、戦はフリージアンとデネの戦であると考えている。それゆえ、チェインバーズは、エーオタンすなわちジュートが、なぜデネを急襲したかについては追求しない。

Hosei University Repository

本稿２.のチェインバーズの『ウィードシース』についての書の引用箇所に戻れば、チェインバーズは、二つの時期のジュートに言及していた。ただ、ユトランドからオランダへの移動の原因には触れず、また、その二つのジュートのフィンズブルフの戦との関連性についても触れていなかった。チェインバーズは、おそらくアングルのように、ジュートは大部分ユトランドからフリージアンの近くに移動したと考えていたのであろう。

５.

これまで、チェインバーズの『ウィードシース』に関する書の、ジュートについての記述を中心に見て来た。また、チェインバーズが、その書で、サクソン、フリージアン、デネについてどのように言及しているかについても触れて来た。チェインバーズの『ウィードシース』についての書の関心は、主にゲルマン人の居住地域にあった。それは『ウィードシース』そのものの記述のあり方からして、自然と言えるかも知れない。また、チェインバーズの『ベーオウルフ』に関する書においては、チェインバーズの関心の一つは、エーオタンという人々の存在で、チェインバーズは、それを極めて論理的にジュートであると論証した。エーオタンがジュートであることを示唆した研究者は他にもいたが、チェインバーズの『ベーオウルフ』に関する書においてほど明晰に論理的に実証されたことはなかった。『ベーオウルフ』の研究史に残る、チェインバーズの計り知れない功績と言えるであろう。しかしながらチェインバーズは、エーオタンすなわちジュートが、なぜフリージアンの近くに居住していたかについては言及していない。

ところで、フィンズブルフの戦のジュートについて、クレーバーによる次のような指摘が存在する(33)。

> Is it possible that the Ags. version embodies two distinct strata of early legend reflecting different phases of the history of the Jutes? The settlement of the tribe in Jutland might have tended to link them to the Danes（ hence Hengest's position ）; on the other hand, the sojourn of the

Hosei University Repository

Jutes in proximity to the Frisians was apt to suggest an especially close relation between these two tribes (hence Eotan = Frysan) .

クレーバーは、チェインバーズと同じように、ジュートがユトランドにいた時期、そして、その後のフリージアンの近くにいた時期の、二つの時期のジュートに言及している。しかしながらクレーバーは、さらに、ユトランドのジュートについては、ヘンジェストと関連させて、デネとの結びつきを強調し、またフリージアンの近くにいた時のジュートについては、ジュートのフリージアンとの結びつきを強調している。それを、クレーバーはジュートの歴史の層と呼んでいるが、重要なのは、ユトランドにいた時のジュートの結びつきについて、ヘンジェストの在り様との関連で述べている点である。つまり、クレーバーは、ヘンジェストはユトランドに残ってデネと融合したジュートの代表と述べているのである。クレーバーは、チェインバーズと同じように、フィンズブルフの戦では、ジュートは、フリージアンの側のみに属していたと考えている。そうであるから、トールキンとは異なり、ヘンジェストが、デネの側にいるジュートの代表として相手側のジュートと戦ったとは考えていない。クレーバーも、チェインバーズのように、フリージアンのもとにジュートがいる理由について、デネの侵入の時のジュートの対応の結果とは考えていなかったかも知れないが、ユトランドに残ったジュートがデネと融合し、その代表がヘンジェストであったと指摘している点が重要である。クレーバーは、そのヘンジェストをブリテン島に渡ってケント王国を造ったヘンジェストとは同一人物ではないと考え、またフィンズブルフの戦の中で、デネの側にジュートはいなかったと考えていた（デネ化したジュートはいたとするが)。しかしながら、デネの側にデネ化したジュートがいて、その代表がヘンジェストのような人物であったとする指摘が極めて重要で、おそらくそこからデネとフリージアンの双方にジュートがいたとするトールキンの説が生まれたものと思われる[34]。

6.

本稿では、『ウィードシース』についての書、そして『ベーオウルフ』につ

Hosei University Repository

いての書におけるチェインバーズのジュートについての見解を検討してきた。また、その関連で、クレーバーの『ベーオウルフ』の編纂書におけるジュートについての見解も、併せて検討した。もう一度、両者のジュートについての見解と、ジュートのフィンズブルフの戦における役割について考えてみたい。

チェインバーズは、『ウィードシース』についての書で、ジュートについては、本文では触れていなかった。アングル、サクソン、フリージアン、デネについては、本文で述べていたが、ジュートについては、巻末の Appendix のところで述べているだけである。その Appendix の文章の一部が、本稿の最初に引用した文章で、ジュートがユトランドを離れてブリテン島に渡った時に、一時フリージアンの領内に居住していたという内容である。

チェインバーズの『ベーオウルフ』についての書で、チェインバーズは、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」に見出されるエーオタンがジュートであるということを見事に論証した。つまり、『ウィードシース』でユィータンとして言及されているジュートが、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」ではエーオタンと記されていて、それが、ユトランドから移住してきたジュートであることを明らかにしたのである。

ところで、チェインバーズは、『ウィードシース』についての書においても、『ベーオウルフ』についての書においても、ジュートがなぜユトランドを離れてフリージアンの領内に居住していたか、その理由には触れていない。おそらく、チェインバーズは、アングルの移住の場合のように、ジュートがユトランド半島から離れた時に、そこに何の問題も生じていなかったと考えているのではないかと思われる。

一方、クレーバーは、『ベーオウルフ』の編纂書で、ジュートの歴史について、二つの段階があって、それが、フィンズブルフの戦に関する古期英語の詩に反映されているとする。デネの側のヘンジェストが、そのユトランドに残ったジュートの代表と考えるのである。クレーバーは、ジュートはフリージアンの側のみに属していたと考え、それはチェインバーズと同じ見解であった。また、チェインバーズもクレーバーも、デネの側のヘンジェストが、後にブリテン島に渡ってケント王国を造ったヘンジェストと同一人物とは考えていない。ただ、クレーバーによる、ヘンジェストという人物の、ユトランドのデネに属し

Hosei University Repository

ているジュートである可能性についての指摘が大変重要である。その指摘から、おそらくトールキンによって、デネとフリージアンの双方にジュートが属していたという説が展開され、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の構造が、明らかにされたと考えられるからである。つまり、トールキンの述べるように、ユトランドにデネが侵入してきた時に、デネに対する二つの異なる立場が生じ、具体的には、フリージアンの地域に移住を余儀なくされたジュートと、ユトランドでデネに帰順したジュートとの対立が生じ、それが『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」で述べられているフィンズブルフの戦の遠因の一つとなったと考えられるのである。

確かにチェインバーズの言うように、フィンズブルフの戦は、ジュートのデネへの急襲で始まった。それゆえ、その意味で、チェインバーズの言うように、ジュートは、フィンズブルフの戦の原因であった。その場合、チェインバーズは述べていないが、ジュートがデネを急襲した理由としてチェインバーズが想定しているのは、かねてから遺恨の間柄にあったフリージアンとデネの関係において、フリージアンに恩義を感じているジュートが、フリージアンに代わってデネを襲撃したということではないかと思われる。いずれにしても、フィンズブルフの戦の引き金になったのは、ジュートのデネへの急襲であり、その意味で、ジュートがフィンズブルフの戦の原因であった。しかしながら、ジュートがデネを急襲した真の原因は、トールキンのように、フリージアンとデネの双方にジュートがいて、そのユトランドへのデネの侵入に対する二つの異なる立場、とりわけ、フリージアンのもとに移動したジュートの、デネと融合したジュートに対する怨念が、フリージアンの側のジュートの急襲の原因とするのが、事実に近いのではないかと思われる。

しかしながら、それは、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」から推測される原因である。もう一つの古期英語の詩『フィンズブルフの戦』においては、フリージアンのもとに移動したジュートの、デネと融合したジュートに対する怨念について強調されていたとは思えない。『フィンズブルフの戦』は、部分的にしか伝えられていないが、おそらくその内容は、ジュートにはそれほど力点が置かれてはおらず、あくまで、デネとフリージアンの対立、その双方の戦がテーマになっていたものと推測される。『フィンズブルフの戦』の冒頭にあ

Hosei University Repository

るデネの王族フネフの、デネとフリージアンの間の深い遺恨の歴史についての言葉からも、その戦の性質が窺われるのである[35]。実際のフィンズブルフの戦がどのようなものであったかは、知ることはできない。ただ、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」を対比してみる時に、実際のフィンズブルフの戦は、おそらくその『フィンズブルフの戦』の詩に近いものであったと想像される。『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」では、デネの国王フロースガールによって、英雄ベーオウルフに対して、デネにもベーオウルフのような英雄ヘンジェストがいたことが強調されている。つまり、ヘンジェストはジュートではなく、デネの英雄でなければならなかった。デネの国王フロースガールは、フリージアン側のジュートを倒したのが、デネの側にいたジュートのヘンジェストであったならば、必ずしもデネの英雄としては讃えられないと考えたからである。かくして、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」においては、ヘンジェストがジュートであることは隠され、ヘンジェストはジュートではなく、デネの英雄となった。それゆえ、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の詩の文脈からして、ジュートがフリージアンの側にしかいないとするチェインバーズも、またクレーバーも、その意味では正しいのである。実際には、双方の側にジュートがいて、それがユトランドでのデネに対する二つの立場に起因する対立にあったとするトールキンの説は、フィンズブルフの戦の実際の様相を正しく再構しているものと思われるけれども。しかしながら、フリージアンのもとに移動したジュートの、デネと融合したジュートに対する怨念が、戦の真の原因であったとしても、実際のフィンズブルフの戦において、原因としてのジュートの役割は全的なものだったとは言えないであろう。『フィンズブルフの戦』のフネフの言葉に見られる、デネとフリージアンの古くからの対立があって、それが遠因となっていたと思われるからである。

注

(1) *Beowulf and the Fight at Finnsburg,* ed. Fr. Klaeber, 3rd ed., D.C.Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950.

(2) Chambers, R. W., *Beowulf——an Introduction to the Study of the Poem,*

Hosei University Repository

edited and supplemented by C. L. Wrenn, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959.

(3) Chambers, R. W., *Widsith——a Study in Old English Heroic Legend,* Cambridge University Press, 1912.

(4) Collingwood, R. G. and Myres, J.N.L., *Roman Britain and the English Settlements,* 2nd ed., Oxford University Press, 1937, pp.345-351.

(5) *Klaeber's Beowulf,* ed. R.D.Fulk, R.E.Bjork, J.D.Niles, 4th ed., University of Toronto Press, Toronto, 2008.

(6) *Widsith: The Exeter Book,* ed. J.P.Krapp, and E. v. K.Dobbie, Columbia University Press, 1936.

(7) *ibid.*, l.26. 実際には与格複数の Ytum で記されている。

(8) *ibid.*, ll.24-27.

(9) Klaeber, *Beowulf,* ll.1071-1159.

(10) *ibid.*, l.1202, l.2355, l.2914.

(11) Beda (Bede). *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum,* ed. Ch. Plummer, Oxford, 1956, Ⅰ－Ⅴ.

(12) Tacitus (Publius Cornelius Tacitus), *Germania.* Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938, Ⅰ－40.

(13) Chambers, *Widsith, op. cit.*, Appendix (D), P.241.

(14) Beda, *op. cit.*, Ⅰ－Ⅴ.

(15) Tolkien, J. R. R., *Finn and Hengest,* ed. A. Bliss, HarperCollinsPublishers, London, 2006, pp.172-180.

(16) Chambers, *Widsith,* pp.71-75.

(17) Chadwick, H. M., *The Origin of the English Nation,* Cambridge University Press, 1907, p.114f, p.138f.

(18) 拙稿「ウィードシースのスウェーヴェについて」、『伊藤廣里教授傘寿記念論集』、伊藤廣里教授傘寿記念論刊行会、2007年。

(19) Chambers, *Widsith,* pp.75-79

(20) Tacitus, *op. cit,* Ⅰ－2; Ptolemaius: Klaudios Ptolemaios, *Claudii Ptolemaei Geographia,* ed. Karl Müller and C. T. Fischer, 2 parts., Paris, 1883－1901, 織田武雄監修、中務哲郎訳、プトレマイオス地理学』、東海大学出

Hosei University Repository

版会、1986年、ＸＩ－7; Plinius（der Ältere）, *Historiae naturalis. Natural History,* ed. and trans. H. Rackham and W. H. S. Jones, Loeb.10 vols., London and Cambridge, Mass., 1938－56, Ⅳ－99.

（21）拙稿「『ベーオウルフ』における Ingwine について」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第８号、2011年、を参照。

（22）厨川文夫、『厨川文夫著作集 下』、金星堂、1978年、「ベーオウルフ」、ヘオロットの項、167－169頁。

（23）Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England,* 2nd ed., Oxford University Press, 1947, pp.12-13.

（24）Chambers, *Widsith,* pp.66-67.

（25）*ibid.*

（26）サクソンの起源については拙稿「サクソンとザクセン――中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景（３）」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第３号、2006年、を参照。

（27）Klaeber, *Beowulf,* ll 1071-1074. 日本語訳は筆者による。

（28）Chambers, *Beowulf,* pp.245-289.

（29）*ibid.*, p.249.

（30）*ibid.*, p.261.

（31）ヘレモードとはデネの古い国王であったとされている。『ベーオウルフ』に二箇所触れられているそのヘレモードの挿話については、別の機会に論じたいと思う。

（32）拙稿「『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について（２）――R. W. Chambers と J. R. R. Tolkien の説を中心に」、『異文化の諸相』、第31号、日本英語文化学会、2013年、を参照。

（33）Klaeber, *op. cit,* p.235, fn 5.

（34）トールキンの説については、注（32）の拙稿を参照。

（35）デネの王族フネフの言葉については、「『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest とジュート」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第９号、2012年、を参照。

Hosei University Repository

ABSTRACT

The Jutes in *Widsith* and *Beowulf*——with Particular Reference to the View of R. W. Chamber

Michio IWAYA

The Jutes are one of the Germanic tribes who migrated to Britain in the middle of the 5th century. According to Beda they came from the northern part of Jutland. Tacitus had also referred to them as Eudoses dwelling in the northern Jutland in his time. But in the old English poems such as *Widsith* and *Beowulf* we find them in the vicinity of the Frisian dominions in the 5th century, when they were about to migrate to Britain. So there are two views about the original home of the Jutes. One is Jutland and the other is Friesland.

R. W. Chamber, one of the most eminent scholars in the history of *Beowulf* research, presented a voluminous book, which deals with many difficult problems about *Beowulf*. He challenged to resolve them and established some important theories about it. His another book, concerning *Widsith,* explained the Germanic tribes in it minutely. Both in his two works he referred to the Jutes and developed his view exhaustively.

This paper tries to survey the Chamber's two works and investigate his view about the Jutes. The Jutes have an important role in the fight at Finnsburg narrated in *the Finn Episode in Beowulf*. So his view about them is concentrated upon it. This paper attempts to grasp the significance of the Jutes' role in *the Finn Episode* and to clarify the reason why they are in Friesland. While consulting the Chambers' works it also examines the view of Fr. Klaeber who published the excellent edition of *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. Finally it aims to search into the entity of the Jutes.